

令和4年度

# 近畿大学附属小学校 学校評価 総括



## 近畿大学附属小学校

KINDAI UNIVERSITY ELEMENTARY SCHOOL

## 2022年度 教育方針など

建学の精神の具現化  
高い進路保障の健全な育成  
高智・徳・体の健全化  
経営状況の健全化

### 1. 私立小学校、私立幼稚園としての付加価値を高める

#### 【教員】

- ・私立学校の教員に相応しい言葉遣い、身だしなみ、態度、品位などを常に意識する
- ・質の高い授業、保育を提供する
- ・高い向上心を持ち、積極的に自己研鑽に励む

#### 【教育内容】

- ・ICTを利活用した新しい授業を構築する
- ・4技能が身につく英語教育の推進する
- ・楽しみで待ち遠しく感じる行事を創造する
- ・あいさつ、返事、履き物を揃えるなどの基本的な生活習慣の定着を図る
- ・思いやりのある子、一隅を照らす人を育成する

### 2. 学力の保障

#### 【授業の主眼】

- ・中学校の授業を十分理解できる基礎学力、語彙力を育成する

#### 【授業の改善】

- ・知的好奇心を刺激する授業を構築する
- ・理解力に応じた個別対応の課題などの解決を図る
- ・ICTの活用、通塾児童も退屈しない工夫を追究する

### 3. 課題の把握と共有

- ・園児募集、児童募集をさらに充実して、定員の確保に努める
- ・幼小の連携を緊密にする
- ・低学力者、課題未提出者への適切な対応に努める
- ・附属中学校推薦制度に基礎学力の目安を設けることを検討する

### 4. 学校評価について

#### (1) 学校評価の種類

自己評価：教職員による評価ならびに、児童アンケート・保護者アンケートによる結果（10月・2月実施）

学校関係者評価：附属中・高等学校校長、附属幼稚園教頭、近友会会長、保教会会長、校長、教頭、教務部長により構成する評価委員会が、自己評価の結果について評価するとともに、改善策等についての提言・勧告を行う。（通常3月に実施）

#### (2) 評価基準

S：目標を上回って達成した（5.0～4.5） A：目標どおり達成した（4.4～3.8）  
B：取り組んだが達成できなかった（3.7～3.1）  
C：ほとんど取り組むことができず、目標も達成できなかった（3.0以下）

### (3) 自己評価について

#### ① 教職員による評価

<p>1. 学校経営の重点</p> <p>(1) 目 標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 開かれた、信頼される学校づくりを進めるため、学校として、あるいは、学年やクラスとして抱える課題に対し、組織的な学校運営を行う。</li> <li>○ 教育活動を広く公開、発信していくことで、在校生保護者との信頼関係づくりに努める一方、開かれた学校づくりを通して、定員確保に向けた児童・園児募集活動を展開する。</li> <li>○ 学校をあげていじめの未然防止に努め、いじめの早期発見と、組織的な事案対処を行う。</li> </ul>		
評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況
① 組織運営	初期対応に重点を置き、教頭、学年主事、学年主任と連携を深め組織的な対応を行う。学年会・学年主任会を有効に活用し、必要に応じて柔軟に話し合いの機会を持つ。「報告・連絡・相談」を組織的に行う。	A
③ 情報の発信・児童募集活動	「開かれた信頼される学校づくり」の実現のため、学級通信、きんちゃんしょうちゃん日記等を通じて、家庭や入学希望者への情報発信をすると共に、定員確保に向けた児童・園児募集活動を展開する。	A
② いじめ対策	いじめが起きにくい環境、いじめを許さない環境づくりに努め、事案に際し、迅速な組織対応を行う。必要に応じてアンケートや個人面談・保護者面談の実施する。	A
結 果 と 分 析 ・ 次 年 度 へ の 改 善 点		
<p>① どの学年も、学級担任、学年主任、学年主事、教頭が組織的に対応することができている。Slackを活用したり、そのつど学年会を開いて情報を共有しながら学級運営を行うことができている学年が多い。主事の業務について、どの学年も連携がとれていることで学年経営、学級経営が円滑に行われているが、保護者対応・児童対応のスキル向上につながっていないように感じる、という意見があった。専科教員と担任との情報共有については課題が残る。</p> <p>② 保護者への情報発信については、学級通信や教科通信にこだわらず、iPadでの連絡帳（「日進月歩」）を活用してタイムリーかつペーパーレスで行うクラスが増えてきている。保護者の理解を得る有効手段となっている。ただ、実際に大切なことが伝わっているか、疑問があるとの意見があった。外部への発信として「きんちゃんしょうちゃん日記」を輪番制で実施することができた。学校広報としての視点で1年間続けてもらった。入試広報委員については、各学年から満遍なく選ぶ方が負担が偏らず、各学年の児童を導入しやすいのではないかと、との提案を得た。</p> <p>③ 児童の日頃の様子を観察し、耳を傾けることなどはもちろんのこと、その問題が起こる原因を考察するなどして、根本的な解決を図りながら、いじめ対策を講じている。QU、いじめアンケートなどを通じて得られた情報を学年内でも共有して、未然に防ぐ努力をしている。教科担任制のメリットを生かし、複数教員での指導を行うことができている。「5」の評価をされた教員がいることから、教員の危機意識の高さを感じている。</p>		
<p>2. 学習指導・研修の重点</p> <p>(1) 目 標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 私立小学校の付加価値を高め、教育内容を充実させるために、今年度の研究テーマ『「令和の近小型教育」の創造～子供の意欲を高める手立てと評価～（前期）』に向けた授業改革・改善を進める。</li> <li>○ 教員の授業力を高め、自己研鑽に励むために、一人一人が当事者となるような研修の実施と、外部研修への積極的な参加を進める。</li> <li>○ 業務を改善および子供の学習環境をより良くしたり広げたりするために、学校DX化を進めたり、オンラインやテクノロジーの活用を広げたりする。</li> </ul>		
評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況
① 基礎学力の定着と学力の向上	各学年・教科部会で、研究テーマに向かった実践を進める。学期ごとに実践記録を作成する。校内研修や教科部会で実践記録を共有し、研究を深化させる。	A

② 「新しい授業」の構築	校内研修に積極的に関わる。校外やオンラインの研修にも積極的に参加し、より多くの実践を見聞したりスキルをアップさせたりする。伝達研修や報告書等で情報を共有する。教育研究部を中心に、有益な情報を学年内研修として共有する。	A
③ 近小の教員としての教員研修	業務や授業、学習環境を見直し、デジタル化を進める。ペーパーレス化や子供・家庭との情報伝達・連携をスムーズにする。	A

結 果 と 分 析 ・ 次 年 度 へ の 改 善 点

- ① 実践記録、Open Day を通して研究を活発にすることができた。1学期に1つ以上の取組を行うことができた。校内研修や教科部会でも互いの授業を共有し、話し合う機会を持つことができた。実践記録が共有され、参考になった。一方、学年や教科部会での検証や共有が十分にできなかった。他の業務を整理していかないと、教材研究や実践共有の時間が確保できないことが問題である。
- ② 外部で学んだことを伝達するような機会が増えた。Slack で情報が共有できている。オンラインでの研修や他校の現地視察などで視野を広げることができた。一方、オンライン研修にはあまり参加できなかった。多くの情報を得ることはできているが、消化できていないところがある。情報の共有はできているが深めるところまでは行っていない。オンライン慣れしていないので、受講する研修の選択がうまくいっていない等の課題が残っている。
- ③ 手紙類はペーパーレス化を図ることができた。Slack を活用して、教員間の連絡の効率化を図ることができたが、文書作成や管理にはまだ課題が多い。学年や学級単位でのペーパーレス化が進んでいる反面、学校からの配布物が紙になっているのが気になる。紙が良いという保護者もいるが、デジタル化による業務の削減が課題である。プリントを整理できない児童が増えてきているように感じる。

3. 生活指導・児童活動・保健衛生・環境整備の重点

(1) 目 標

- 規範意識を育成し、高めていくため徹底した指導を行う。
- 子どもたち自らが諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる。また、異年齢交流を深め、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする態度を育てる。
- 子どもたちの心身の健康を中心に、安心、安全を考慮した集会や活動を計画し、実施する。

評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況
① 生活指導と安全	挨拶、身だしなみ、登下校マナーの徹底指導をしていく。特に、挨拶指導に重点を置き、教員自らが率先垂範を心がけて指導に取り組む。	B
② 児童活動	教育の通常化を目指し、学校行事や異年齢の交流活動（フロア活動、クラブ、委員会など）を計画し、工夫して実施する。	B
③ 保健衛生と体育	怪我予防や熱中症、感染症（特に新型コロナウイルス感染症）等の予防や対策を実施していく。	A

結 果 と 分 析 ・ 次 年 度 へ の 改 善 点

- ① 生活指導については「登下校指導」や「挨拶指導」について多くの教員から意見を寄せられた。本年度は特に挨拶に関して、教員の意識を高くもって進めてきた。ただし、児童の実情は目標を達成するまでには至っていない点が多いという意見が多かった。特に挨拶に関して、学舎・学習旅行などの特別な場合は意識できているが、日常に戻るにつれ意識が薄れていきがちになったり、学期の中盤や終盤にかけて児童の挨拶の声が少なくなってきたりし、中には未だ挨拶をしても全く返ってこないと言う厳しい声もあった。部としても年度当初から最重要の課題として進めていたにも関わらず、実感を持った改善にまで至っていないことが反省点である。今後さらに教員の意識の差を無くすことや全体への働きかけについてもより強く打ち出していく必要がある。また保護者への啓発を具体的に進め、学校と家庭が同じ方向で指導を進め、児童の意識を高めていく必要性もある。勿論ではあるが、年度当初のスタートについても具体的に進めていく必要がある。

「登下校指導」については、苦情が多かった時期に比べ少なくなっており、課題はあるが改善に向かっているのではないかと感じている教員が多かった。教員には、日々の生活指導や登下校において細かく指導を行っている。ただし、状況によってはまだ電車内で本を出さずにいる児童がいるので、

さらに全教員で指導の徹底を図っていく必要がある。

- ② 児童活動については、本年度もコロナウイルスの影響が依然強くあったが、教育の通常化に向け昨年度よりも学校行事や異年齢交流を前に進めることができたとの意見が多かった。本年度の反省として企画や運営を進める上で見通しをもって進めていくことや児童にかかわることに関しては、さらに早く伝達すべきとの声もあった。また、週番活動など形骸化している取組となっているのではないかと指摘もあり、活動や行事の目的や児童に身につけたい力は何かを考え来年度に生かしていく必要がある。来年度に向け、さらに教育の通常化を目指す、コロナ前にただ戻すという意味の通常化ではなく、より持続的で、今の子供達を取り巻く環境や変化、必要性に応じた行事や活動のあり方を常に考えていく機会としたい。今年度に行った行事や活動の反省について、来年度も継続していく活動や行事の企画や運営を見直す点についても考えていく。
- ③ 保健衛生と体育については、多くの教員がコロナなどの感染症対策に気を付けながら様々な活動を進めてきた。特に体育的な行事においても、大きな事故や怪我も少なく概ね安全に実施することができたという意見を多く寄せられた。今後も感染対策や全体的な児童の体力の低下などは大きな課題であり、今後継続的な体力について向上できる機会を考えていく必要がある。

#### 4. 進路指導・学習評価の重点

##### (1) 目 標

- 附属中学校・高等学校の6年間で十分についていける学力を身につけさせる。
- 個々の学力推移を的確に把握し、子どもひとりひとりの学力を伸ばしていけるようにする。
- 各学年において具体的な実践を通して、キャリア教育を進めていく。

評価項目	取り組む内容（指針）	達成状況
① 適切な進路指導	昨年度、取り入れた「内部推薦プレ判定」に加え、本年度より内部推薦の判定に「基礎学力を有する」基準を加えて運用していく。全学年において、基礎学力を身に付けさせる取組を個に応じた講じていくとともに、学年に応じた学習習慣を身に付けさせ、進路保につないでいく。	A
② 進路保障 (内部進学)	全学年において、学力推移表（進路指導部作成）や日々の学習記録をもとに、児童ひとりひとりの学力を伸ばしていけるようにする。また、本年度より、4年生以上で基礎学力検定を年間2回実施し、基礎学力の定着をより確かなものにしていく。	A
③ 進路学習の充実	低学年では、自分の好きなこと、得意なこと、できることを増やし、様々な活動への興味・関心を高めながら意欲と自信をもって活動できるようにする。中学年では、友だちのよさを認め、協力して活動する中で、自分の持ち味や役割を自覚することができるようにする。高学年では、苦手なことや初めて経験することに失敗を恐れず取組み、そのことが集団の中で役立つ喜びや自分への自信につながるようにする。	B

#### 結 果 と 分 析 ・ 次 年 度 へ の 改 善 点

- ① 内部推薦の判定の第一基準に「基礎学力を有する」基準を加えて運用することができた。本年度、内部推薦者46人を決定した。これは、学年全体の人数の43%にあたり、昨年同様の割合であった。また、学年全体における内部推薦認定率は約89%(昨年85%)で微増であった。全学年において、基礎学力定着のための課題に取り組ませることができた。その結果、低学力層への児童への補充指導を進めやすくなり、学力向上につながることができた。
- ② 個々の学習状況の把握に努め、必要に応じて補充学習を取り入れた。特に、進路指導部から出される学力推移表をもとに、学力に課題のある児童に向けての指導を重点的に行うことができた。また、4～6年生対象に基礎学力検定を実施し、基礎学力の定着を確認するとともに、個々の教員の授業力の改善を意識した指導が展開されている。
- ③ 学校生活や学校行事の中で、興味や関心を高められるように、指導の手立てを工夫しながら進めている。また、苦手なことにも挑戦できる仲間づくり、得意な児童が苦手な児童を支え合えるような意識をもつように指導している。その結果、学級や学校をよくしていこうと意欲的に取り組む児童が増えてきた。一方で、友だちを受け入れることが難しい児童もいる。年度末に作成する児童カルテを活用しながら、新年度に向けて児童理解を深め、指導にあたっていけるようにする。

## (2) 児童アンケートの考察

児童の『振り返りシート』には、様々な活動や体験を通して、「登山では頑張って最後まで登った」「学舎・学習旅行が楽しかった。帰って知りたいことが増えた」といった肯定的な自己評価が多く、児童が学校生活をそれぞれの受け止め方で満喫している姿が伝わってきて、教職員にとって、励みとなった。一層近小教育の充実を図らなければと決意を新たにしているところである。

## (3) 保護者アンケートの考察

### ● 学校の教育方針について

おおむね、本校の教育方針に賛同いただき、引き続き、叡智教育（知育）道徳教育（徳育）健康教育（体育）の調和の取れた教育の充実に努めてく。本校教育の根幹にかかわる重要な行事と位置付けて復活させた学舎・学習旅行については、過大な負担をおかけすることになってしまった。

### ● コロナ禍の教育活動について

コロナ禍以前の教育活動に一日でも早く戻すことを目指した本校の取組については、賛否両論の意見を頂いた。本校としては、児童の安心・安全を第一とした取組を進めてきたが、連絡・通知が遅いなど、心配をかける結果となってしまったことを反省している。

### ・ ICT教育について

ICT教育への取組については、おおむね、好評価を頂いたが、低学年からの導入は早すぎるのではないかと、担任との連絡は、紙ベースの方がよいのではないかと等々の指摘を受けた。今後の教育の動向を見据えながら、より効果的な運用・利活用の仕方について探っていく必要がある。

### ・ 生活指導について

乗車マナーをはじめとした公共マナーの徹底に努めているところではあるが、乗客や地域住民の方からの苦情が相変わらず後を絶たないのが現状である。特に、行事の際の近隣での駐車について非常に厳しい非難が寄せられている。各家庭ならびに保教会の『見守り隊』の協力を得ながら、改善に努めていく必要がある。

決められた約束を守り、規律正しい生活習慣の確立と法令を遵守して毅然と指導すべきとの厳しい意見も頂いた。本校と致しては、学校教育法施行規則第26条、本校の学則第21条等に基づき、学校の秩序を乱し、児童としての本分に反したと判断した場合には、別室登校、出席停止といった措置をとる。

尚、それでも改善が見られない場合には、退学（転出）といった措置をとらざるを得ないと考えている。

### ・ 安全指導について

子ども向け携帯電話については、許可書を提出して頂き、登録の上、使用を認めている。安全上の観点により、子ども向け携帯電話の使用を推奨している。

### ● ケータリング給食について

「回数を増やして欲しい」「選択制にして欲しい」「より美味しいケータリング給食になるようにして欲しい」等々数多くの意見を頂いた。『ケータリング給食』についての授業を実施する等、食育指導とも関連させた指導を進めていく。業者との連携・調整をさらに図り、回数を増やすことなど、不満に応えることができるよう、より充実したケータリング給食を目指して、改善に努める必要がある。

### ● 進路・進学指導について

進路・進学についての情報開示を一層進めるとともに、進路説明会の充実に努めていく。本年度より『近小ゼミ+』を実施し、基礎学力の定着に向けた取組を引き続き進めるとともに充実を図っていく。

## ● 学級や授業について

風邪様疾患等による出席停止に鑑み、リモート授業を求める声を聞いた。そのことにも十分留意しながら、授業を進めてきたが、保護者のみならず、児童にも、自宅待機中の学習等について、多大な心配をかけることとなってしまった。ICT教育とも連動させて、授業の在り方について、今後とも追究していく。

## 5. 学校関係者評価について

### (1) 本年度の教育活動についての概括

校長から冒頭、コロナ禍ではあるが、教育活動の正常化に向けて、学舎・学習旅行の復活をはじめとした学びの環境を整えることに専念した1年であったと総括した。これを受けて教頭が、令和4年度学校経営方針並びに「学校アンケート」の結果から、児童自身に言葉遣いや挨拶の不徹底、登下校マナーが悪いといった自覚があるが、意識が行動になかなか結び付けることができない、教員も同じ認識であり、早急に実践化していく必要があること挙げた。続いて、「チーム学校」、「チーム学年」としての取組はうまく進めることができている。コロナ禍への対策については、賛否両論があったが、おおむね理解を得られた。ICTについては、保護者の理解も進んではいるが、紙ベースの必要性についてや「読み・書き・計算」など、基本的な事柄については、鉛筆とノートを使った反復学習の必要性についての指摘・不安があったことについて説明した。保護者来校時の駐停車については、一部の保護者に限られるとはいえ、未だ改善されないため、地域住民から厳しい非難の声が寄せられていることに触れ、引き続き啓発していく必要を痛感していると説明した。附属中学校進学に向けた「近小ゼミ+」の取組等を通して、低学年では学力低位の子供に対して焦点化した個別指導を行いボトムアップを図っている。附属中学校への内部進学に向けては学力、行動の両面を見ていく。特に、学力に対しては、『基礎学力検定』を導入し、学力の向上に努めていること、年度末の『診断的テスト』を通して、経年比較について考察している。併せて、ICTを活用し、学力に歯止めをかけている最中であり、一定の成果を得ることができていることを説明した。

### (2) 挨拶やマナーについて

附属中学校・高等学校教頭より、「挨拶」や「公共交通機関の利用の仕方」については、小学校同様、中・高等学校でも課題であると指摘され、解決策として、本年度『生徒支援部』を立ち上げ、生徒共々解決を図るべく、具体的な方策を追究しているところであるとのことであった。

### (3) コロナ禍におけ蹴る教育活動について

コロナ禍の教育活動については、中高でも共通した課題であり、どのように正常化させていけばよいのか模索しているところであるとのことであった。

### (4) 主体的な学習者の育成について

主体的な学習者をどの様に育てていけばよいのか。その方策として、ICT教育、とりわけ、『チャットGPT』について話題となった。一方、近畿大学学園の根っこの部分を充実していくといった観点から『読み・書き・計算』の必要性についても論議となった。ICT教育で学力が上がったとしても、社会に出たらどうなのか、挨拶がしっかりできない若者が増えてきているのではないかといった苦言も呈せられ、幼小9年間で身に付けるもの、根っこになる部分を大切にしていこうの必要性へ言及がなされた。併せて、わざわざ高い学費を出してまで私学に通わせているといった誇りをしっかり身に付けて欲しいといった指摘もなされた。

授業に関しては、ICT教育の進展により授業の在り方そのものが、刻々と変化してきているが、学校での子供たちの姿は変わっていないことを説明した。これに対して、子供自身もやがて自分で選んでいく。その前の土台づくりが大切ではないかと指摘された。時代の流れや変化を大切にしていきながら、来年度121人という定員を確保することができたが、そのことに安住することなく、

少子化や経済的な問題、コロナなど、県内の私学はどこも厳しい状況であるため、近畿大学や附属高校、中学校と一層の連携を図りながら、私学という特別な子供達を預かっているという自覚をもって、教育活動を進めていきたいと説明し、了承を得た。

以上、本年度の教育活動について了承が得られた。今後とも、近畿大学学園の附属小学校として、附属幼稚園との一貫教育に基づく教育活動を再開していくとともに、附属中学校・高等学、大学との連携を深めていくことで、私学としての質の高い教育を推進し、児童や保護者の信頼や期待に応えられるよう教育改善を進めていく。

